

## 漢文教科法への一試案

佐藤 毅

### 1 問題提起にかえて

近年、国語教育において漢文の果たす比重は減少傾向にある。一時期ゆとり教育の流れの中で国語教育の時間数を減少させる標的になり、大学受験科目から削除させる傾向は現在に至っている。

しかし、江戸期においては幕府直轄の昌平黉を始め、多くの藩校が孔子廟を配してその教育の中心的位置もしくは役割を果たした。音読・朗読・暗唱という方法を用い、「論語」を中心にして進めたのは、江戸幕府の精神的支柱に儒教を置き、その解釈に朱子学を置いたことにある。織田、豊臣、徳川に象徴される全国統一の目的は、下克上世界が招いた混乱を治めるところにあった。徳川幕府はその治政の支柱として儒教を根本思想とし、それらを背景とした規律を作り上げること下克上の危険性を防止したのである。それゆえ藩校のようなエリート教育において「論語」を中心科目とし、またその教育方法は、寺子屋という民衆教育の中にも浸透することになった。

それら二百年を越える教育方法は、時間と共に中国文化を越えて日本文化の中心的部分を構成するに至るのである。次に示すのは「論語」の「学而第一」である。

子曰。學而時習之。不亦説乎。有朋自遠方來。不亦樂乎。人不知而不愠。不亦君子乎。

「子曰く、学びて時に之を習ふ。亦説ばしからずや。朋有り、遠方より來たる。

亦樂しからずや。人知らずして愠おらず、亦君子ならずや。」

「子」は、孔子という一人の思想家を越えて、常に「孔子先生」もし

くは「先生」として、この言説に疑問を挟む余地を残してはいない。「学」の対象は「論語」「大学」「中庸」「孟子」の言わば四書であり、加えて「易経」「書経」「詩経」「礼記」「春秋」の五経をさすというふうに解釈するが、孔子自身が自らの「論語」を学の対象とするはずもないのだから、正確には「詩経」と「書経」、加えて礼であり楽でなければならぬ。しかし、この「学而第一」においては、「学」は学問であり、かつ勉強することの大切さにテーマは収斂され、その対象は問題では無くなっている。

その思考は、江戸時代に限らず近代に至っても変わることはない。教育者がかつ作家で、「次郎物語」という代表作で記憶される下村湖人（二八八四―一九五五）に、「現代訳論語」という著作がある。一九五四年に池田書店から発刊され、のち角川文庫、新版でEBC選書にもなったものである。その現代訳が次のものである。

先師がいわれた。聖賢の道を学び、あらゆる機会に思索体験をつんで、それを自分の血肉とする。なんと生き甲斐のある生活だろう。こうして道に精進しているうちには、求道の同志が自分のことを伝えきいて、はるばると訪ねて来てくれることもあるだろうが、そうなったら、なんと人生は楽しいことだろう。だが、むろん、名聞が大事なのではない。ひたすらに道を求める人なら、かりに自分の存在が全然社会に認められなくとも、それは少しも不安の種になることではない。そして、それほどに心が道そのものに落ちついてこそ、真に君子の名に値するのではあるまいか。

この訳出に孔子の生きた時代観はない。「聖賢の道」とは政治権力を有した人間の道ではない。「思索体験」「精進」「求道の同志」があれば、「名聞」は得られず「社会に認められなくても」「君子の名」に値する生き方を手中にできる、とするのである。

これはほんの一例に過ぎない。漢文の教材は、中国の文学作品であり、随筆であり、論説であるにも関わらず、その背景にある時代論、時代思潮論あるいは作家論、文壇論といったものは、ほとんど用意されていない。

文学作品は、作者が何を伝えようとしたかではなく、説者がどう読み取ったかに重要性があるという姿勢で、これらの作品を読み解くならば、江戸の昌平黉、藩校、寺子屋加えて、一例として示した下村湖人のような姿勢は認められて行くのかも知れない。つまり受容者側の解釈である。日本における漢文受容は、常に受容者側の論理で行われていたことを最初に確認しておかなければならない。

## 2 教科書に扱われた漢文学作品

### ① 中学校の場合

中学校の国語教科書は、教育出版、東京書籍、光村図書、三省堂、学校図書の各社を見る限り、一年生には故事成語の「矛盾」(韓非子)や「五十歩百歩」(孟子)を載せ、その後は「論語」を二年生に、三年生には漢詩もしくはその逆の形を取っている。具体的な漢詩としては、杜甫の「春望」や李白の「黃鶴樓にて」がほぼ定番の形で掲載されている。杜甫の律詩「春望」は、安史の乱・安祿山の乱(七五五〜七六三)という大規模な反乱を背景として作られた作品である。

国破山河在 城春草木深 感時花濺淚 恨別鳥驚心 烽火連三月 家書抵萬金 白頭搔更短 渾欲不勝簪

この安史の乱・安祿山の乱を背景にした名作として白居易の「長恨歌」があるが、中学校の教科書には、まだ触れられていない。それに対して「春望」は、「おくのほそ道」平泉の脚注にも掲げられ、杜甫の詩に溢れる戦いの不毛性と残酷さの実感、松尾芭蕉の感慨と共通す

ることを記している。

国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て、時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

(「奥の細道」)

また、「矛盾」や「五十歩百歩」といった故事成語の成立と使用例を教えるにとどまり、その時代背景にまで深入りすることは避けている。

### ② 高等学校の場合

高等学校の教科書は、中学校と比較すると教科書の数は多くなり、漢文掲載は「国語総合」が大半となる。そのリストを次に掲げる。

東京書籍「新編国語総合」、東京書籍「精選国語総合」、東京書籍「国語総合古典編」、三省堂「高等学校国語総合古典編」、三省堂「新編国語総合」、教育出版「国語総合」、教育出版「新国語総合」、大修館書店「国語総合」、大修館書店「新編国語総合」、明治書院「精選国語総合」、明治書院「精選国語総合」、明治書院「新編国語総合」、右文書院「国語総合」、筑摩書房「国語総合」、筑摩書房「精選国語総合古典編」、旺文社「高等学校国語総合」、第一学習社「高等学校国語総合」、第一学習社「高等学校標準国語総合」、第一学習社「高等学校新編国語総合」、桐原書店「展開国語総合」、桐原書店「探求国語総合古典編」

その教科書に使用されている作品を次に列挙する。

【故事】五十歩百歩(孟子)、杞憂(列子)、朝三暮四(列子)、刻舟求劍(呂氏春秋)、知音(呂氏春秋)、矛盾(韓非子)、守株(韓非子)、塞翁馬(淮南子)、螳螂之斧(淮南子)、借虎威(戰國策)、漁父之利(戰國策)、蛇足(戰國策)、母咎(說苑)、苛政猛於虎也(礼記)、断腸(世説新語)、推敲(唐詩紀事)

【史伝・史話・逸話】四面楚歌(史記)、管鮑之交(史記)、晏子之御(史記)、鶏鳴狗盜(史記)、華王之優劣(世説新語)、王戎不取李(世説

新語)、魏武捉刀(世說新語)、王昭君(世說新語)、子猷尋戴(世說新語)、前有大梅林(世說新語)、臥薪嘗胆(十八史略)、管鮑之交(十八史略)、晏子之御(十八史略)、鷄鳴狗盜(十八史略)、鷄口牛後(十八史略)、蘇秦(十八史略)、刎頸之交(十八史略)、張儀(十八史略)、三年不飛不鳴(十八史略)、先從魏始(十八史略)、刺客荆軻(十八史略)、死諸葛生走仲達(十八史略)、王昭君(西京雜記)、畏後頭(五雜俎)

【詩】絕句(五言) 十二首

春曉(孟浩然)、登鸛鶴樓(王之渙)、雜詩(王維)、竹里館(王維)、靜夜思(李白)、絕句(杜甫)、「江碧鳥逾白」、「秋日(耿湜)、秋夜寄丘二十二員外(韋應物)、江雪(柳宗元)、秋風引(劉禹錫)、勸酒(于武陵)、登樂遊原(李商隱)

絕句(七言) 十七首

涼州詞(王翰)、送元二使安西(王維)、黃鶴樓送孟浩然之廣陵(李白)、早發白帝城(李白)、春夜洛城聞笛(李白)、贈汪倫(李白)、山中問答(李白)、峨眉山月歌(李白)、除夜作(高適)、楓橋夜泊(張繼)、秋思(張籍)、江南春(杜牧)、清明(杜牧)、贈別(杜牧)、山行(杜牧)、山亭夏日(高駢)、春夜(蘇軾)

律詩(五言) 六首

送友人(李白)、旅夜書懷(杜甫)、春夜喜雨(杜甫)、登岳陽樓(杜甫)、春望(杜甫)、月夜(杜甫)

律詩(七言) 三首

登高(杜甫)、香炉峰下、新卜山居、…(白居易)、八月十五日夜、禁中獨直、…(白居易)

古詩二首

子夜吳歌(李白)、貧交行(杜甫)

【文章·說話·小說】

復活(搜神記)、桃花源記(陶潛)、春夜宴桃李園序(李白)、雜說(韓愈)、

人面桃花(本事詩)

【思想】(論語)

子曰、「學而時習之、(學而)、有子曰、「其為人、(學而)、子曰、「巧言令色、(學而)、曾子曰、「吾日三省吾身、(學而)、子曰、「弟子入則孝、(學而)、子曰、「不忠人之不已知、(學而)、子曰、「道之以政、(為政)、子曰、「吾十有五而志于學、(為政)、子游問孝、(為政)、子曰、「溫故而知新、(為政)、子曰、「學而不思則罔、(為政)、子曰、「由、誨女知之乎、(為政)、子曰、「富與貴、(里仁)、子曰、「朝聞道、(里仁)、子曰、「士志於道、(里仁)、子曰、「參乎、吾道一以貫之、(里仁)、子曰、「見賢思齊焉、(里仁)、子曰、「道不行、(公治長)子謂子貢曰、「女與回也孰愈、(公治長)、宰予昼寢、(公治長)子曰、「甯武子、邦有道則知、(公治長)、冉求曰、「非不說子之道、(雍也)子曰、「質勝文則野、(雍也)、子曰、「知之者、(雍也)、子貢曰、「如有博施於民、(雍也)、子曰、「不憤不啓、(述而)、子謂顏淵曰、「用之則行、(述而)、子曰、「飯疏食、(述而)、子曰、「我非生而知之者、(述而)、子曰、「三人行、(述而)、子以四教、(述而)、子曰、「仁遠乎哉、(述而)、子在川上曰、「逝者如斯夫、(子罕)、既焚、(鄉党)顏淵死、子哭之慟、(先進)、季路問事鬼神、(先進)、子畏於匡、(先進)、仲弓問仁、(顏淵)、司馬牛憂曰、「人皆有兄弟、(顏淵)、子貢問政、(顏淵)、季康子問政於孔子、(顏淵)、子曰、「其身正、(子路)、樂公語孔子曰、「吾党有直躬者、(子路)、子曰、「君子和而不同、(子路)、子曰、「剛毅木訥、(子路)、子曰、「莫我知也夫、(憲問)子路問君子、(憲問)、衛靈公問陳於孔子、(衛靈公)、在陳絕糧、(衛靈公)、子曰、「已矣乎、(衛靈公)、子貢問曰、「有一言而可以終身行之者乎、(衛靈公)、子曰、「吾嘗終日不食、(衛靈公)、孔子曰、「益者三友、(季氏)

【孟子】

孟子見梁惠王。王曰、「叟不遠千里而來、(梁惠王上)梁惠王曰、「寡人之於國也、(梁惠王上)、孟子對曰、「王好戰。請以戰喻、(梁惠王上)孟子曰、

「無恒産而有恒心者、(梁惠王上)、孟子曰、「仁人心也。(告子上)、孟子曰、「君子有三樂。(尽心上)」「莊子」北冥有魚。(逍遙遊)、昔者莊周夢為胡蝶。(齊物論)

### 【日本漢文】

航西日記(森鷗外)、山行示同志(草場佩川)、送夏目漱石之伊予(正岡子規)

これらの作品群から一例として『史伝・史話・逸話』に分類される「畏饅頭」について教材化の難しさを考えてみよう。出典は『五雜俎』。明の長楽出身の謝肇湖が撰した著作である。一説に宋代の文人である葉夢得の隨筆「避暑錄話」にも同様のものである。遼東の女真が後日に明朝の災いになるであろうことを記したために、清代になって軍機処によって破棄され、閲覧することができなくなった。中華民国になって復刻されている。原文には次のようにある。

有窮書生、欲食饅頭。計無從得。一日見市肆有列而饜者。輒大叫仆地。主人驚問。曰、「吾畏饅頭。」主人曰、「安有是。」乃設饅頭百枚置空室中。閉之伺於外、寂不聞聲。穴壁窺之、則食過半矣。亟開門詰其故。曰、「吾今日見此、忽自不畏。」主人知其詐、怒叱曰、「若尚有畏乎。」曰、「更畏臘茶兩椀爾。」

口語訳としては『五雜俎 八』平凡社東洋文庫、岩城秀夫訳注にもあり、また日本人には馴染みのある落語「まんじゅうこわい」としても知られている。落語の演目としては、「寿限無」や「目黒のさんま」に並ぶ有名な噺でもある。もともとは風来山人(平賀源内)編『剛笑府』(安永五年一七七六刊)にある話を落語化したものと考えられる。単純な笑話として授業計画もそれほど難しくはないと思われるがちな題材である。それゆえ書生(教材によっては「貧士」とある場合も)が店の主人を騙

して饅頭と茶をまんまと手に入れたというだけで終わってしまう危険性を持っている。明代の謝肇湖が考える「知恵」とは何か。また、その翻案を試みた平賀源内は、どのような意図のもとに江戸っ子に紹介したのか。戯作の思想は、幕府の三大行政改革(享保の改革・寛政の改革・天保の改革)に意図された文化弾圧に徒手空拳の文化人が編み出した最大の武器であった。その先駆が風来山人であったとしたら、教科内容は変わってくる。

力のあるものに力のない者が対抗する方法、あるいは富者に対して貧者が対抗する方法は、「知恵」以外にないとする思考がこの話の主題であり、謝肇湖も風来山人もこの話の真価をそこに求めている。単純に「騙し」の滑稽さと狡猾さを教室で語るならば、教科書としての体をなさないと考えなければならぬ。その浅薄な解釈の危険性は前述の杜甫「春望」と松尾芭蕉「奥の細道」のなかにも同様に含まれている。玄宗皇帝の治政と安史の乱・安祿山の乱の樞因から創出された杜甫の「春望」と、鎌倉幕府治政の源頼朝と奥州藤原三代栄華との戦いの跡に立つ松尾芭蕉の感慨を同様に見ることはできない。

用例としては少ないという批判があるかも知れないが、前述の教科書所収の作品群には多かれ少なかれ同様の問題をはらんでいる。

### 3 学習指導要領にみる漢文の取り扱い

昭和三十年代、高等学校の国語は甲乙と分類されていた。漢文が含まれる甲に対して「高等学校学習指導要領国語科編」で次のような記述がある。

国語科漢文の学習の材料は、「国語(甲)」の中に掲げた漢文の材料をさらに広げ、漢文で書かれた和漢の論説類、史伝類、語録類、詩文類、小説類などの中から、生徒の能力や必要や関心などを考慮して選ぶ。

これらの材料を総合的にまとめ学習させてもよいし、その中の一つによって、学習させてもよい。いずれにしても、「国語(甲)」の中の漢文の学習に照らし合わせて、適切に材料を選び、有効な計画を立てることが 肝要である。(第5章国語科漢文、2内容)

加えて、それらに関する留意事項として次のように述べている。

・「漢文」の目標や内容に照して、あまりに専門的、特殊的にわたる

ような材料を選んだり、指導を行ったりしないように留意する。

・時には簡単な複文や白文の練習が必要な場合もあるが、このことだけを、特に取り上げて、学習の目標としないようにする。(第

#### 5章国語科漢文、3留意事項)

この考え方は、平成二十年高等学校学習指導要領にも同じような意図で、次のような記述となっている。

読む対象として、古典としての古文と漢文、古典に関連する文章を示し、それらを読むことによって、我が国の伝統と文化に対する理解を深めることと、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成することとを示している。最初に「古典としての古文と漢文」とあるが、「古典としての」とは、単に上代から近世までの文章という時代的な範囲だけではなく、長年にわたって伝えられ、現代においても、なおその価値を保っているものということである。「古文と漢文」は、古典の教材には古文と漢文の二つがあることを示している。また、古典としての漢文とは、我が国の古典として享受されてきた漢文を指し、日本人が培った漢文すなわち日本漢文も含んでいる。(高等学校学習指導要領解説 国語編平成二十二年文部科学省)

ここで注目すべき事は、「古典としての漢文」とは、我が国の古典として享受されてきた漢文」としてあるところである。昭和三十年の学習指導要領でも示された通り、漢文は中国文学としての意識ではなく、

既に日本文学(古典)として取り扱われていることである。また、それは古典Aと比して古典Bの方に更に意識的に記述される。

「古典A」の内容の取扱いの(一)では「古文と漢文の両方又はいずれか一方を取り上げることが出来る。」としているのに対し、「古典B」では「両方を取り上げるものとし、一方に偏らないようにする」としている。これは、「古典B」が、科目の目標に「古典としての古文と漢文を讀む能力を養う」と示しているように、古文と漢文は我が国の古典として共に重要なものであり、それを讀むことができるように、両方を取り上げて生徒に学習させることが必要だからである。そこで、古文と漢文のいずれか一方に多くの時間をかけたり、取扱い方に深淺が生じたりすることがないよう配慮し、全体として両者をバランスよく指導する必要がある。(同第6節古典4内容の取扱い平成三十年)

古文と漢文は日本文学における古典として重要なものであり、そのどちらかに偏りや深淺を生じないようバランスに注意しなければならぬとしている。この優れた見識に異論はない。しかし、日本文学史を考えたとき、菅原道真の権勢の背後には大陸(中国)文学に対する權威主義があり、国風文化の暗黒時代を現出したのではなかったか。また、菅原道真と藤原時平の権力争いの背後に紀貫之を筆頭とする和文学一派が息を潜めていたのではなかったか。第一勅撰和歌集である「古今和歌集」の「仮名書」に高らかに宣言されている六歌仙の記述は和文学の失地回復の言葉である。しかし、これを異文化の衝突と捉えるか、和文学止揚の生みの痛みと捉えるかは論の分かれるところである。やがて紫式部は「源氏物語」で「長恨歌」を引用しながらも清少納言には漢文学の豊かな素養を批判(嫉妬)し(紫式部日記)、時代は飛んで曲亭馬琴の「南総里見八犬伝」にある素養、あるいは中島敦の「山月記」、「名人伝」などに見られるのは、異文化との衝突ではなく日本文学の止

揚として捉えなければならないところである。おそらくこの指導要録に示された「バランス」とは、この止揚部分を指して言われたものであるろう。

#### 4 教材読解及び鑑賞の障害の克服

漢文教育は元々外国語である作品を日本語のように読み替えて行く多くの発明とマジックを土台としている。それは、語法、文法、年表といった煩瑣な教材を意味している。たとえば語法においては、訓読と訓点、返読文字、再読文字であり、文法においては、否定形、禁止形、疑問形、反語形、使役形、受身形、仮定形、比較形、抑揚形、限定形、累加形、感嘆形であり、年表は中国文学史に加え、日本文学年表との交流軌跡の確認等が要求される。これらの技法、知識伝授がなければ、読解には至ることがない。漢文の授業時数が減少傾向にあることは既に前述したが、その限られた時間数は、恐らくこの技法の伝授と理解に費やされることになる。しかし、その技法はあくまでも作品理解と鑑賞に至るまでの中途作業であることを認識しておかなければならない。技法伝授が目的化したところに漢文教育の未来はない。ここで考えなければならぬことは、時間的制約の中で技法の教化伝授をいかに効率的に通過し、本丸である作品理解と鑑賞に至るかということである。

目的意識が判然としない状況で教科指導を行えば、そのゴールには行き着くことが出来ない。寺子屋のように「読書百遍」の教育方法が出来れば、「意自ずから通ず」に至るであろう。しかし、この時間的制約の中にあつて技法の速やかな理解こそ目的到達への早道と言える。この自明の理を踏まえて、なお新たな方法を模索するヒントが次の文章にある。

「現代文A」の目標では「我が国の言語文化に対する理解を深め」るとしているが、「古典A」では、読む対象が古典であることから、理解を深める対象を「我が国の伝統と文化」としている。急速に国際化の進む社会で生きていくに当たって、諸外国の伝統と文化を理解しそれを尊重するためにも、我が国の伝統と文化について自覚し、我が国と郷土を愛し、それを尊重する態度を育成することが大切となる。そこで、我が国の文化の形成に強い影響を与えた中国の文化との関係について考察することなどを通して、我が国と外国とのかかわりにも関心をもち、我が国の伝統と文化をより深く理解する必要がある。「生涯にわたって古典に親しむ態度を育てる」は、長年にわたって伝えられてきた古典を読むことを通して、人間、社会、自然などに対する様々な考え方や感じ方を知り、人生を豊かにしていくことのできる人間を育成することを示している。(同第5節古典A1性格)

従来の漢文教育をコロンブスの卵のように転換し、訓詁注釈的な教科法から文化教育、文化理解、伝統理解という場所からスタートすることである。日本文化のアイデンティティもしくはナショナルイズム教育が古典教育の中に反映されれば、その延長線上に読解への興味と情熱は用意されるものと考えられる。異文化理解と日本文化の理解は表裏をなすという原則は、決して英語をはじめとした外国語教育に限られたものではない。古典教育、漢文教育の場はこの意識を導入することが、現代日本の初等、中等、高等教育の問題に一石を投じるものとなるはずである。